高校の部《優秀賞》

「『舞姫』を読んで」

高校三年　　西川　果歩

自分が考えていることと相手が思うことには必ず多少のずれが生ずる。それが男女という性別の違いを持つならば尚更である。

本来、物語の中で男女が恋に落ちるものであれば、ハッピーエンドで終わるものが多いが「舞姫」は違う。それこそ、豊太郎とエリスが互いの想い、そして、相手との距離を測り違ってしまったことが悲劇の始まりだったのである。

二人が出会ったとき豊太郎は二十五歳、エリスは十六、七歳だったと書かれているが、豊太郎の視点で描かれているこの話の中で、彼の未熟さが目に付く場面が多く見られる。周囲に言われるがままに生きてきた人生、自我に目覚めてからのエリスとのやりとり、そして最終的には己の官途の道を選び、エリスを発狂させてしまったことなど、こうしてみるとエリスは豊太郎の未熟さに振り回された悲劇のヒロインそのものに思われる。しかし、本当にそうなのであろうか。確かに豊太郎は未熟な面を持っていたが、その反面、エリスが持つ幼さが隠れてしまっていたのではないだろうか。

エリスが豊太郎に出会った時、彼女は不幸の真っ直中にいた。身の上は貧しく、父を失い、母に売られた少女にとって、突如現れた豊太郎は救いの光そのものだったのだろう。正にすがる思いだったに違いない。その時からエリスには豊太郎しか見えていなかったのである。それも、関係が続いていく中で日毎に深みは増していく。　豊太郎がエリスを想っていたのは事実だろう。しかし、エリスを想い続ける傍らで、自らの可能性を追い求めていた部分もあった。それが相沢の登場によってより近いものとなっていたのだから、気持ちが揺らいでしまうのも分からなくはない。そして、次第に自らの可能性を崩す存在となりうる恋人、エリスを重荷として背負うようになっていたのである。そんな中、エリスの身には豊太郎との子供が宿る。その身に愛しい人の子供を身籠もったことで豊太郎との新しい生活に思いを馳せていたのだろう。しかし、それこそ彼女の未熟さだったのではないだろうか。

エリスの誤りは母になる喜びを「豊太郎との新たな人生」に置き換えてしまったことだ。本来、母になる喜びとは、子供を産み、育てようとする強い意志そのものであるはずだ。それをエリスは子供ができたことで新しい希望をその手に握ったのだと誤解してしまった。母になるという重大な責任に気付けなかったのだ。確かに、エリスは我が子のためにと木綿やレース、さらには産着を用意している場面がある。しかし、私にはその場面でさえもエリスが母になろうとする強い意志より、豊太郎との新たな生活への準備にしか見えない。豊太郎もそんな彼女を心のどこかで更なる重荷に感じていたのだろう。

そもそも、互いに想い合っていた豊太郎とエリスがここまですれ違ってしまったのは何故だろうか。私が思うに、豊太郎は、恋愛、結婚、自分の人生を切り離して考えていたのだろう。豊太郎にとってエリスは恋愛の対象ではあったが、結婚や、ましてや自分の人生の全てとはなり得なかったのである。方やエリスは豊太郎こそ自分の人生そのものだと感じていた。

それが、互いの未熟さ故か、男女の違いによるものなのかは分からないが、二人の感情のずれがこのような悲劇を巻き起こしてしまったことは事実である。
　豊太郎の裏切りによって発狂してしまったエリス。未熟さ故に彼女にはその身に宿った子供を支えにして生きてゆくだけの逞しさがなかった。もし、エリスにその逞しさがあったなら、彼女には新しい別の人生が切り開かれたことだろう。それと同時に、このような儚く、美しい悲恋は生まれなかったのかもしれない。